

# 日本語の複合助詞「について」「に対して」「にとって」の選択

## ——日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較——

杉 村 泰

### 1. はじめに

本稿は日本語の複合助詞「について」、「に対して」、「にとって」の選択について論じたものである。『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コンコーダンスー2015』を検索すると、例(1)～例(5)のような誤用例が出現する(矢印の右が正用)。

- (1) 子供の時わたしは人生にとって (→について) いろいろな設計があった。
- (2) 今回の選択は将来の人生について (→にとって) 非常に重要なことです。
- (3) 私にとって (→に対して)、彼はその事に反対しません。
- (4) 時間の移り変わりに従って、人は年齢を増やすから、幸福にとって (→に対して) の理解が変わります。
- (5) 私に対して (→にとって) 両親は不可欠な人なので、どんなことがあっても私は必ず彼たちと一緒に生活して、彼たちを世話して、私は大人になる。

これに関して、杉村(2018)では誤用の原因について考察した。これを受け、本稿では日本語母語話者と中国人日本語学習者(上級、中級)における「について」、「に対して」、「にとって」の選択傾向の違いについて論じる。その際、述語の性質の違いに着目する。

### 2. 先行研究

「について」、「に対して」、「にとって」に関しては、森田・松木(1989)、張(2001)、庵・高梨・中西・山田(2002)、横田(2006)、グループKANAME(2007)など多くの先行研究がある。

このうち森田・松木(1989)はこれら3つの表現について次のように説明している。

#### ・「について」

「動詞「つく」の“本来関係のなかった事物が他の事物に接触して離れない状態になる”

という性格を引きついでいるため、対象との緊密度が強く、対象を指示するだけでなく、それと限定する意識がある」(p. 8)

「言語活動や思考活動に関する語を修飾することが多く、「言う」「話す」「相談する」「想像する」「報告する」などと共起しやすい。連体格「についての」が修飾する体言も、「意見」「説明」「考え」「判断」「研究」などといった語が多く、物理的な作用等にはなじみにくいようである。(c・e) これは、「について」に対象と密着してそれを深く掘り下げる意識があることの現れで、その意味では静的な表現といえるかもしれない」(p. 10)

・「に対して」

「動作や感情が向けられる対象を指示する機能を果たす。動詞「対する」の“他のものに向かう、応じる”意を引きつぐため、目標を示すといった方向性や、相対する人物・事物への反作用性などが示唆されることが多い」(p. 9)

「方向性・反作用性があるところから、対象より少し離れた地点、または相対する地点で対称をとらえる意識があり、対象を深く掘り下げるのではなく、対象を受け手として何らかの物理的・心理的作用を及ぼすことを意図している。そのため、「反抗する」「反発する」「抵抗する」のような相手との対立関係を表す語とも共起しやすい」(pp. 10-11)

・「にとって」

「判断や評価を成立させる立場・視点を示す表現で、“～の身から見て”の意で主に人物を受ける。稀に無生物も受けるが、擬人法などの特別な場合や、“～を中心として考えると”の意で何かの事物に視点を移してながめた場合に限られる。また、元の動詞「とる」が、他の事物を自己側に引き入れる行為を示すところから、「にとって」は受け手としての立場・視点を表す意識が強いと言えよう」(p. 5)

このうち森田・松木(1989)は「について」と「に対して」を類義表現として捉え、例(6a)～(6d)の各対を比較して、取りうる動詞に上記のような違いのあることを指摘している。例(6d)の場合も、動詞は同じでも「について」を使うと「説明する内容は息子のことである」(p. 11)という意味になり、「に対して」を使うと「説明する相手は息子である」(p. 11)という意味になるとしている。その上で、「二語の入れ換えが可能なのは、「答える」「反論する」といった対象に作用を及ぼす意味合いの言語活動や、「興味がある」「関心を持つ」「中立を保つ」「不平を持つ」「敬意をいただく」などの心的傾向を表す語を修飾する場合である」(p. 11)と述べている。

- (6) a. 生徒の疑問 {について / に対して} 答える。  
 b. 川端文学 {について / \*に対して} 研究する。  
 c. 警官 {\*について / に対して} 抵抗する。

d. 息子 {について / に対して} 説明する。

(それぞれ森田・松木 (1989) の例文 a, b, c, d, e, f, g, h をまとめたもの)

森田・松木 (1989) の説明はその後の研究にも引きつがれている。ただし、(6a) の場合も「生徒の疑問について答える」の「疑問」は疑問の中身を表すのに対し、「生徒の疑問に対して答える」の「疑問」は「疑問⇔答え」という答えの対立概念で、答えを与える相手先を表すという違いがある。そのため、(6a) も (6d) と同様に「について」と「に対して」では意味が異なると考えられる。また、森田・松木 (1989) は「に対して」と「にとって」の類似点については論じていないが、日本語学習者の誤用を見ると、両者の類似点についても見る必要がある。

張 (2001) は、例 (7)(8) のように「について」も「に対して」も使える場合と、例 (9)(10) のように一方しか使えない場合のあることを示している。

(7) あの意見 (に対しては / については) 私も反対です。

(8) 君の好意 (に対しては / については) 大変ありがたく存じております。

(9) 彼は女性 (に対しては / \*については) 親切に指導する。

(10) 彼は彼女の私生活 (\*に対して / について) 調べている。

(張 (2001) の例文 (37)、(38)、(39) 改変、(40) 改変)

その上で、張 (2001) は「について」は行為や態度が関連する物事を表し、「に対して」は行為や態度が向けられる対象を表します。それが上の例 (37)(38) のように、表している事柄が「行為や態度が関連する物事」とも「行為や態度が向けられる対象」ともとれて、「について」と「に対して」の両方の意味的条件を満たしている場合はどちらも使ってよいということになるのですが、そうでなければ互いに置き換えることは難しいのです (p. 81) と論じている。ここで問題となるのは、どのような事態が「行為や態度が関連する物事」で、どのような事態が「行為や態度が向けられる対象」なのかという判断において、日本語母語話者と学習者の間でズレが生じる場合があるということである。それがどこかを探っていく必要がある。

庵・高梨・中西・山田 (2002) は、「について」の意味を「述語が表す動作や状態が関係する対象を表す形式です」(p. 16) として、「考える、話す、語る、述べる、聞く、書く、調べる」など言語による情報を扱う動詞が述語に来ます (pp. 16-17) と指摘し、「に対して」の意味を「動作・感情・態度の向けられる対象を表します」(p. 15) としている。また、中国語母語話者や韓国語母語話者は「に対して」と「にとって」に相当する語が母語で同じであるためよく混同するとしうえて、例 (11)(12) を挙げて、「にとって」は、「重大だ、難しい、大切だ」などの評価を表す語が述語になり、そのような評価をもたらす人やもの、出来事が主語になります。この点で「に対して」とははっきり区別されます (p. 16) と論じている。

- (11) この文型は初級の学生 {×に対して / ○にとって} 難しい / 重要だ / 大切だ / …。  
 (12) 先生は学生 {○に対して / ×にとって} 厳しい / 優しい / …。

(庵・高梨・中西・山田 (2002) の例文 (12)、(13))

ただし、5節で見ると、中国人日本語学習者は「に対して」と「にとって」を混同する場合もあれば混同しない場合もある。そのため、母語による影響以外に日本語自体の要因についても探る必要がある。

横田 (2006) は森田・松木 (1989) を敷衍して、「に対して」と「に」、「を」、「について」、「にとって」の違いについて論じている。横田 (2006) は、動詞「対する」の意味と並行的に捉え、「に対して」には「A 二つのものが向かい合う場合」(例「昨年の6.3%に対して今年が5.8%」)と「B 一方が他方を相手にする場合」(例「父は子供に対してやさしかった」)の2つに分けられるとしている。このうち本稿で扱う「に対して」はBの場合である。その中で、例(13)の「尊敬する」や例(14)の「差別する」のように「を」を取る動詞は「に対して」を取らないが、似たような意味でも「尊敬の念を持つ」や「差別態度をとる」のように言うとき「に対して」を取ることができると指摘している<sup>1)</sup>。

- (13) 祖父に対して { \*尊敬する / 尊敬の念を持つ }。(横田 (2006) の例文を改変)  
 (14) 外国人児童に対して { \*差別する / 差別態度をとる }。(横田 (2006) の例文を改変)

また、横田 (2006) は、「にとって」は「その立場から見れば」という意味を表し、その立場から見た評価を表す表現が続くが、第4章の「に対して」の意味分類5「態度・感情の対象」(本稿の「相手への態度・感情」に相当)と混同され、誤用を生むのではないかとと思われる」(p. 29)として、例(15)(16)を挙げている。

- (15) この本は私 { にとって / \*に対して } 難しすぎる。(横田 (2006) の例文を改変)  
 (16) この本は子ども { にとって / ?に対して } 有害だ。(横田 (2006) の例文を改変)

その上で、例(16)の「に対して」の許容度が上がる理由を「この本は子どもに読まれる時有害だ」の「子ども」は第4章の意味分類6「反応・作用の対象」(本稿の「対象への効果」に相当)と考えることもでき、多少違和感はあるが、「この本は子どもに読まれる時有害になる」という意味を表すことができる。この場合、「にとって」と「に対して」は同様な意味を表すことになる」(p. 29)と述べている。このあたりの説明が少し分かりにくいのが、本稿の立場から言い直すと、「難しすぎる」が単に本の属性(価値判断)を表しているだけなのに対し、「有害だ」は本の属性(価値判断)を表すだけでなく子どもへの作用(効果)も表すと捉えら

れる。そのため、前者は「にとって」しか使えないが、後者は「にとって」だけでなく「に対して」の許容度も上がるのである。このように述語の機能が揺れる部分で日本語母語話者と日本語学習者の選択に違いが出やすいと考えられる。

グループ KANAME (2007) は、「について」、「に対して」、「にとって」の用法について詳しく記述したものである。本稿ではこの記述を参考にして3語の用法を考えることにする。

### 3. 「について」、「に対して」、「にとって」の用法

本稿では杉村 (2018) と同様に、グループ KANAME (2007) の記述を参考にして、「について」、「に対して」、「にとって」の用法を下の①～③のように考える。まず「AはXについてY」は、主体AがXで表される対象に関して、Yで表される心理活動や知的活動を行うことを表す表現である。この場合、AにはYの感情や行為の主体、XにはYの対象となる名詞句（「事件のこと」のようなコト名詞句を含む）、Yには思考・感情、認識、調査・研究、言語活動を表す動詞が来る。グループ KANAME (2007: 5) では「関係性の表明・働きかけ」を表す「一致する / 分ける / 否定する / 取り合わない / 任せる / (理由・原因が) ある」もYに来る要素として挙げられているが、これらの語は「一致する (と考えられる)」、「分ける (つもりだ)」などの括弧内の表現が省略されたものであり、思考表現の一種であると考えられる。

#### ① 「AはXについてY」、「Xについて、AはY」(关于X, A做Y)

**文型**：主体 NP は+対象 NP について+VP (思考・感情、認識、調査・研究、言語活動)

**例文**：(17) 私は事件の真相について考える。(思う、悩む、迷う、感じる、気付く) 思考・感情

(18) 私は事件の真相について知る。(分かる、見る、忘れる、承知する、理解する) 認識

(19) 私は事件の真相について調べる。(研究する、検討する、勉強する、審理する) 調査・研究

(20) 私は事件の真相について話す。(語る、聞く、書く、読む、尋ねる、触れる) 言語活動

次に「AはXに対してY」は、主体AがXで表される対象に関して、Yで表される行為や態度を取ることを表す表現である。この場合、AにはYで表される行為や態度の主体、XにはYの対象となる行為や態度・感情が向かう相手（人または事柄）、Yには相手からの働きかけへの対応・対抗、相手への一方向的な働きかけ、相手との対極的な立場、相手に対する態度・感情、相手に対する効果を表す動詞や形容詞が来る。グループ KANAME (2007: 27-30)

では「Xに対して」の「X」を「行為の向かう先である対象」、「対抗・抵抗・対処する行為の対象」、「態度・感情の対象」、「反応・作用の対象」の4つに分けている。しかし、相手からの働きかけがある場合とない場合を区別したり、意図的な「反応」と非意図的な「作用」（本稿の「効果」）をはっきり区別したりしたほうが「対する」の意味の派生を捉えやすいため、本稿では次のように分類する。

② 「AはXに対してY」、「Xに対して、AはY」（对于・针对X，A做/感到Y）

**文型**：主体NPは+対象NPに対して+VP/AP（対応・対抗、働きかけ、対極的立場、態度・感情、効果）

- 例文**：(21) 大統領は彼（の意見）に対して反対する。（賛成する、反論する、答える、応える、反撃する、戦う）相手からの働きかけに対する対応・対抗
- (22) 大統領は被災者に対して物資を送る。（語る、約束する、哀悼の意を示す）一方的働きかけ
- (23) 大統領は議会に対して拒否権がある。（説明責任を有する、有意だ）対極的立場
- (24) 大統領は国民（の生活）に対して関心がある。（興味がない、理解がある、冷たい）相手への態度・感情
- (25) この薬は新種のウイルスに対して効果がある。（有効・無効だ、（効き目が）強い・弱い）対象への効果

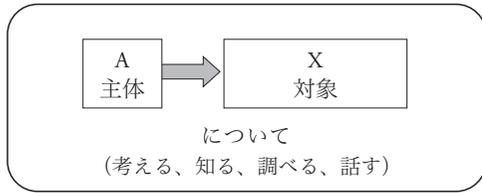
最後に「AはXにとってY」は、主題Aに関して、Xの面（範囲・立場）から見ればYの価値があるということを表す表現である。この場合、AにはYの属性主体、XにはYの価値判断の範囲を表す名詞句（個人、組織、国、地域などのほか「人生、関係、民主主義、経済、安全、研究」など）、Yには価値判断を表す形容詞、動詞、名詞が来る。

③ 「AはXにとってY」、「Xにとって、AはY」（对X来说，A是Y）

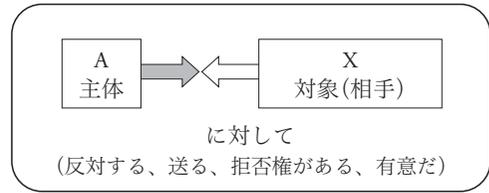
**文型**：主題NPは+対象NPにとって+AP/VP/NP（価値判断）

- 例文**：(26) 彼は私にとって必要だ。（不要だ、重要だ、価値がある、命の恩人だ、白馬の王子だ）価値判断
- (27) 彼の存在は私の人生にとって欠かせないものだ。（意味がある、価値がない、過去のものだ）価値判断

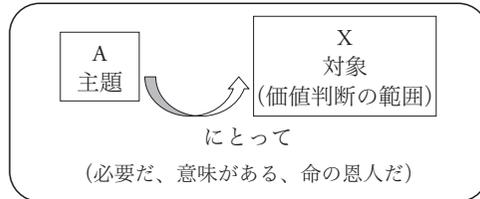
これらの表現のプロトタイプの意味を図示すると、図A～図Cのようになる。図Aの「について」は、主体Aが対象Xに近付くことによって、対象をより詳細に捉えて思考・調査・言論をする様子を表している。図Bの「に対して」は、主体Aが対象Xと対面し、対象に何



図A 「について」のイメージ



図B 「に対して」のイメージ



図C 「にとって」のイメージ

らかの働きかけや態度を取る様子を表している。図Cの「にとって」は、AをXの手元に取り、XにおけるAの価値判断をする様子を表している。

#### 4. アンケートの概要

筆者は次のような「について」、「に対して」、「にとって」の三者択一テストを24問実施した。このうち本稿では例①～例⑳の6組20問について論じる<sup>2)</sup>。

- I. ①私は事件の真相に (ついて、対して、とって) 考えた。
  - ②私は事件の真相に (ついて、対して、とって) 疑問を持った。
  - ③私は事件の真相に (ついて、対して、とって) 興味があった。
  - ④彼の証言は事件の真相に (ついて、対して、とって) 欠かせなかった。
- II. ⑤子供のころ、私は人生に (ついて、対して、とって) いろいろ考えた。
  - ⑥子供のころ、私は人生に (ついて、対して、とって) いろいろ悩んだ。
  - ⑦子供のころ、私は人生に (ついて、対して、とって) いろいろ疑問を持った。
  - ⑧子供のころ、私は人生に (ついて、対して、とって) いろいろ興味があった。
  - ⑨子供のころ、私は人生に (ついて、対して、とって) いろいろな設計があった。
- III. ⑩今回の選択は将来の人生に (ついて、対して、とって) 非常に重要なことだ。
  - ⑪今回の選択は将来の人生に (ついて、対して、とって) 考えるのに非常に重要なことだ。
- IV. ⑫私に (ついて、対して、とって)、彼はその事に反対しなかった。
  - ⑬私に (ついて、対して、とって)、彼はその事に反対しない人物だった。

- ⑭私に（ついて、対して、とって）、彼はその事を知っている。
- V. ⑮人は年齢を増すと、幸福に（ついて、対して、とって）の理解が変わる。
- ⑯人は年齢を増すと、幸福に（ついて、対して、とって）理解するようになる。
- VI. ⑰私に（ついて、対して、とって）両親は不可欠な人だ。
- ⑱私に（ついて、対して、とって）両親は関心がない。
- ⑲私に（ついて、対して、とって）両親はよく接してくれる。
- ⑳私に（ついて、対して、とって）両親はよく接してくれる人だ。

被験者は日本語母語話者（以下「日本人」と呼ぶ）、中国語を母語とする上級日本語学習者（全員 N1 合格者。以下「中国人（上級）」と呼ぶ）、中国語を母語とする上海師範大学日本語科の2年生（ほぼ N2 合格程度。以下「中国人（中級）」と呼ぶ）の3者である。これを以下に示す<sup>3)</sup>。

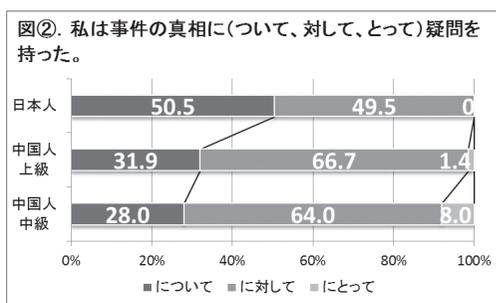
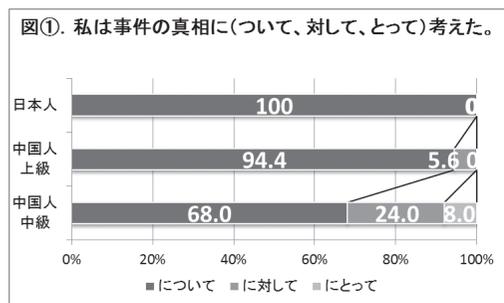
- ・日本人：名古屋大学、愛知淑徳大学の学生 合計109人（2017年4月11～18日実施）
- ・中国人（上級）：西安外国語大学、北京語言大学、名古屋大学、愛知淑徳大学、上海師範大学の学生 合計72人（2017年9月27日～2018年5月14日実施）
- ・中国人（中級）：上海師範大学の2年生 合計25人（2018年5月3～8日実施）

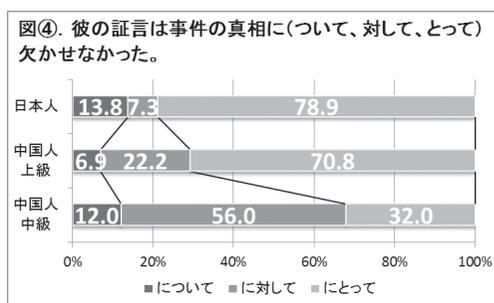
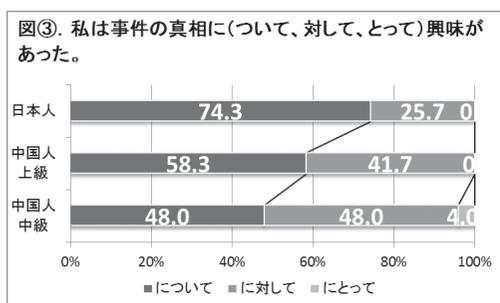
## 5. アンケート結果

本節では先に示した6組20問の選択テストの結果を基に、日本人、中国人（上級）、中国人（中級）の「について」、「に対して」、「にとって」の選択傾向の違いについて論じる。

### 5.1. I（①～④）について

まず、先のIの例①～例④（図①～図④）の選択傾向について論じる。





例①は述語に「考える」が来て、対象である「事件の真相」に関して思考活動を行うことを表す。この場合、日本人全員が「について」を選択しており、「考える」は「について」と共起しやすく、「に対して」や「にとって」とは共起しにくいことが分かる。この場合、中国人(上級)もほとんどの人が「について」を選択しているが、中国人(中級)は「について」の選択率が68.0%と最も高いが、「に対して」も24.0%選択されており、上級学習者ほどは「について+考える」というコロケーションが身に付いていないことが分かる。ただし、「にとって」は8.0%しかないことから、「にとって」は「考える」と共起しにくいということは身に付いているようである。

次の例②は述語に「疑問を持つ」が来ている。この場合、日本人は「について」と「に対して」の選択率がほぼ半々になっている。これは述語の「疑問を持つ」が静的な感情を表すとも動的な対象への態度表明とも捉えられるためである。すなわち、話し手が前者の捉え方をした場合は「について」が選択され、後者の捉え方をした場合は「に対して」が選択されると考えられる。この場合、中国人(上級)や中国人(中級)も「について」と「に対して」の両方を選択しているが、「に対して」の選択率の方が2倍以上になっている。このことから、中国人学習者は「疑問を持つ」という表現に対して、日本人より対象への働きかけの意を感じやすいことが窺われる。

次の例③は述語に「興味がある」が来ている。この場合も、日本人は「について」と「に対して」の両方を選択しているが、「について」の選択率の方が約3倍多い。これは「興味がある」は話し手の静的な感情を表し、「疑問を持つ」に比べて対象への働きかけ性が弱いためであると考えられる。この場合、中国人(上級)も中国人(中級)も「について」と「に対して」の両方を選択しているが日本人に比べて「に対して」の選択率が高くなっている。このことから、中国人学習者はこの文を日本人より対象への働きかけを表す文として捉えやすいことが分かる。

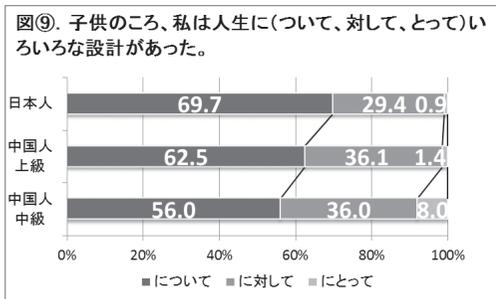
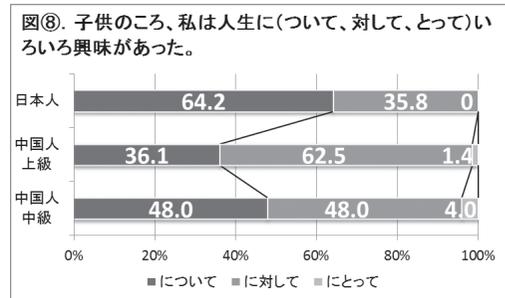
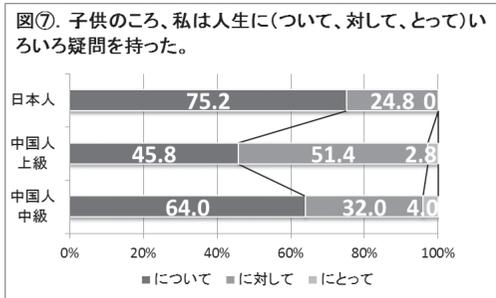
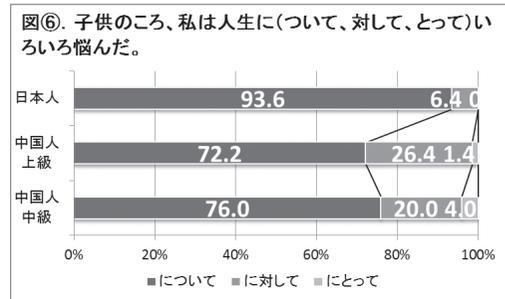
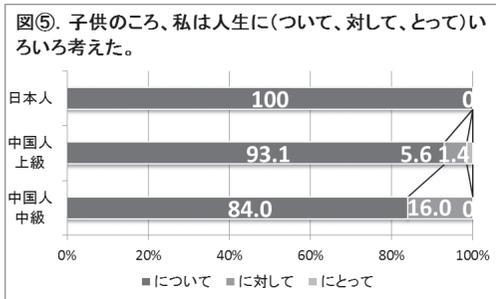
次の例④は述語に「欠かせない」が来ている。この場合、日本人は「にとって」の選択率が78.9%と高く、価値判断を表す文として捉えやすいことが分かる。この場合、中国人(上級)も「にとって」の選択率が70.8%と高く、価値判断を表す文として捉えやすいのに対し、中国

人（中級）は「にとって」の選択率が32.0%しかなく、「に対して」の選択率が56.0%と最も高くなっている。このことから、中国人（中級）はこの文を対象への働きかけを表す文として捉えやすいことが分かる。

以上例①～例④の場合、中国人日本語学習者は中級から上級になるにつれて日本人に近い選択ができるようになるようである。

## 5.2. II (⑤～⑨) について

次に、先のIIの例⑤～例⑨（図⑤～図⑨）の選択傾向について論じる。



例⑤は述語に「考える」が来ている。この場合も先の例①と同様に、日本人は全員が「に対して」を選択し、中国人（上級）もほぼ全員が「に対して」を選択しているが、中国人（中級）は「について」の選択率が84.0%と最も高いが、「に対して」も16.0%選択されており、上級

学習者ほどは「について+考える」というコロケーションが身に付いていないことが分かる。

次の例⑥は述語に「悩む」が来ている。この場合、日本人はほぼ全員が「について」を選択しているのに対し、中国人（上級）と中国人（中級）は「について」の選択率が70%以上あるものの、「に対して」の選択率も20%以上ある。これは「悩む」は悩みの対象（「人生」）から話し手に向けて悩みを抱かせるという影響があり、それに対応して思いをめぐらすという対象への働きかけの意味が感じられるためであると考えられる。そのため、対象からの働きかけを感じにくい例⑤に比べ、日本人も中国人（上級）も中国人（中級）も「に対して」の選択率が高くなっているのである。

次の例⑦は述語に「疑問を持つ」が来ている。この場合、日本人は「について」も「に対して」も選択しているが、先の例②とは違い、「について」の方が「に対して」の3倍ほど選択率が高くなっている。これは例⑦の「人生への疑問」の方が例②の「事件の真相への疑問」に比べて働きかけが弱いためであると考えられる。そのため、相対的に働きかけの弱い例⑦は例②に比べて「に対して」の選択率が低いのである。しかし、例⑥に比べると「に対して」の選択率が高いため、「悩む」より「疑問を持つ」の方が対象への働きかけが強いと考えられる。この場合、中国人（上級）や中国人（中級）も、「に対して」の選択率が例②よりは低く、例⑥よりは高くなっている。ただし、どちらも日本人に比べて「に対して」の選択率が高くなっており、「疑問を持つ」という表現に対して、日本人より対象への働きかけを強く捉えていることが窺われる。

次の例⑧は述語に「興味がある」が来ている。この場合、日本人は例③と同様に、「について」の選択率の方が「に対して」より高くなっている。このことから「興味がある」は話し手の静的な感情を表し、対象への働きかけが弱いことが分かる。この場合、中国人（中級）は「について」と「に対して」の選択率が半々で、例③と似た選択傾向となっている。しかし、中国人（上級）は例③に比べて「に対して」の選択率が約20ポイント高くなっている。

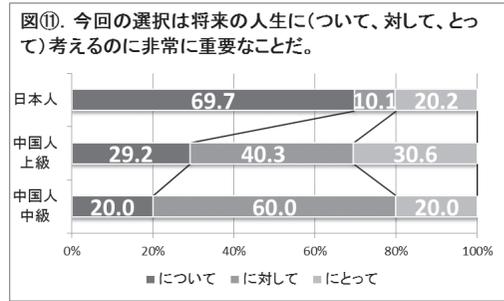
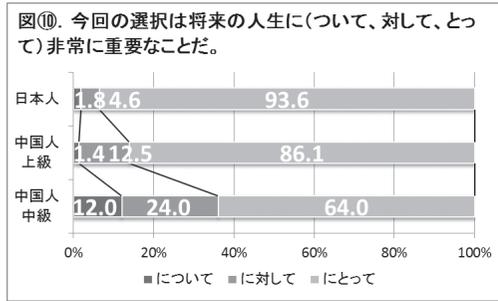
次の例⑨は述語に「設計がある」が来ている。「設計がある」という表現は少しぎごちなく、普通は「設計した」と言うと思われるが、例(1)の誤用例を確認するためにあえてアンケート項目に入れたものである。この場合、日本人も中国人（上級）も中国人（中級）も「について」の選択率が最も高く、「に対して」はその半分ほどで、「にとって」はほとんど選択されていない。「について」が選択されやすいのは、「設計があった」は「設計する」に通じ、「研究する」や「検討する」のような調査・研究の意味を帯びるためであると考えられる。一方、「設計があった」は対象である「人生」に設計を施すという働きかけの意味も感じられるため、「に対して」も選択されると考えられる。しかし、価値判断の意味は見出しにくいいため、「にとって」は選択されにくいのである。例(1)のように「にとって」を使ってしまう誤用は、少なくとも本稿の三者択一テストを見る限り、あまり多くなさそうである。

以上の例を見ると、例⑤と⑨は中級から上級になるにつれて日本人に近い選択ができるよう

になっているが、例⑥はあまり変化がなく、例⑦と⑧は逆に中級より上級の方が日本人から遠い選択になっている。この理由については今後明らかにしていきたい。

### 5.3. III (⑩～⑪) について

次に、先のIIIの例⑩～例⑪ (図⑩～図⑪) の選択傾向について論じる。



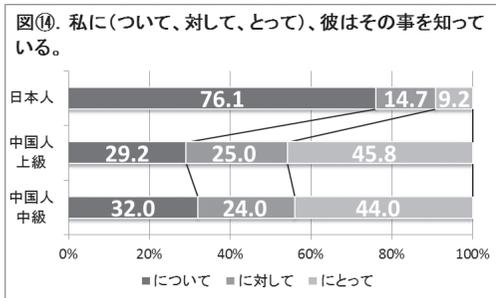
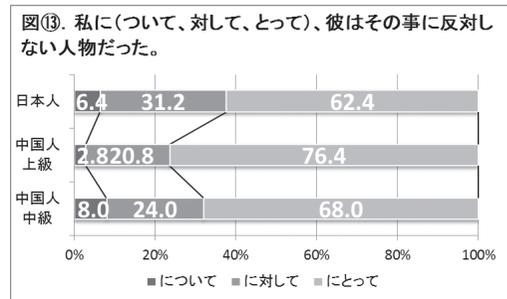
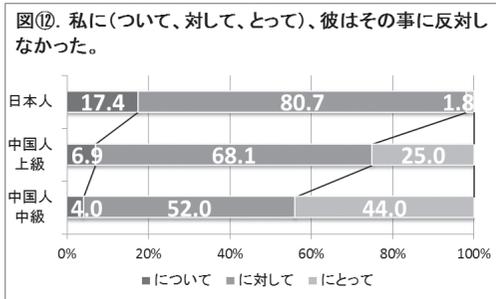
例⑩は述語に「重要なことだ」が来ている。「重要なことだ」は価値判断を表すため、日本人はほとんどの人が「にとつて」を選択している。一方、中国人学習者は中級では64.0%の人は「にとつて」を選択していないが、上級になると86.1%の人が「にとつて」を選択している。このことから、「重要なことだ」のように価値判断の意味が強い語が述語に来ると、「にとつて」を選択しやすいことが分かる。

次の例⑪は「AするのにBだ」という補文構造になっており、Aには思考を表す「考える」、Bには価値判断を表す「重要なことだ」が来ている。この場合、日本人は「考える」に係ると捉えれば「について」を選択し、「重要なことだ」に係ると捉えれば「にとつて」を選択する。その結果、「について」が「にとつて」の3倍以上選択されている。これは選択肢のすぐ後に「考える」があるため、真っ先に「について」と結合しやすいためであると考えられる<sup>4)</sup>。なお、日本人で「に対して」を選択した人も10.1%いた。例①や例⑤で見たように、「考える」は「について」と共起しやすいが、例⑪の場合は先の図Bに示したように「将来の人生」が「今の自分」と向かい合っているイメージがある。そのため、対象への働きかけを表す「に対して」を選択した人がいたと考えられる。これに対し、中国人(上級)は「に対して」の選択率が40.3%と日本人の4倍あり、中国人(中級)は60.0%と6倍もある。このことから、図⑪の場面は中国人学習者にとって対象への働きかけを表すイメージが強いことが分かる。

### 5.4. IV (⑫～⑭) について

次に、先のIVの例⑫～例⑭ (図⑫～図⑭) の選択傾向について論じる。

例⑫は述語に「反対しない」が来ている。この場合、日本人は「に対して」を選択する人が80.7%と多い。「反対する」や「反対しない」は相手への働きかけを表すため、「に対して」の



イメージにふさわしいのである。一方、中国人学習者も「に対して」の選択率が一番高いが、中国人(上級)では25.0%の人が「にとって」を選択し、中国人(中級)ではさらに多い44.0%の人が「にとって」を選択している。このことから、中国人学習者にとってこの文は相手への働きかけのイメージだけでなく、価値判断を表すイメージ、すなわち「彼はそのことに反対しない人物だ」の意味でも捉えられていると考えられる。

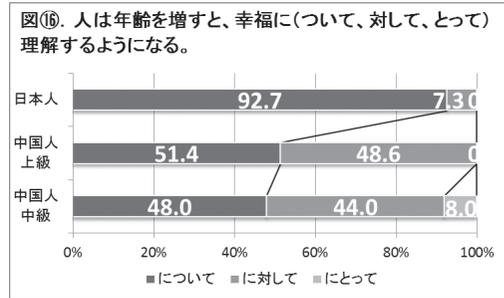
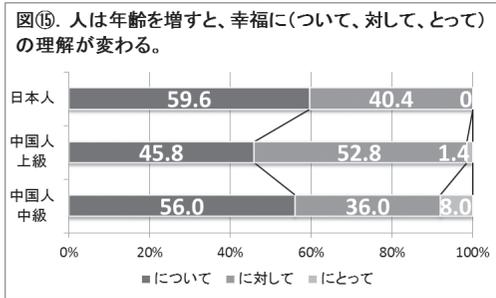
次の例⑬は述語に「反対しない人物だ」が来ている。この場合、日本人は「に対して」と「にとって」がおおよそ1対2の割合で選択されている。ここで「に対して」を選択した人は「反対しない人物だ」の「反対しない」という相手への働きかけ(行為の不履行)を表す部分に係ると捉え、「にとって」を選択した人は「～人物だ」という価値判断を表す部分に係ると捉えていると考えられる。この場合、中国人(上級)と中国人(中級)も「に対して」より「にとって」の選択率が高くなっており、日本人と似た選択傾向を見せている。

次の例⑭は述語に「知っている」が来ている。この場合、日本人は「について」の選択率が76.1%と高い。「知る」は思考・感情を表すため、「について」のイメージにふさわしいのである。しかし、この場合も中国人日本語学習者は「にとって」の選択率が高くなっている。これは「知っている」自体に価値判断の意味はないが、中国人日本語学習者はこの文を「彼はそのことを知っている人物だ」という価値判断の意味で捉えている可能性がある。

以上、述語自体には価値判断の意味がなくても、例⑫や例⑭のように価値判断の意味が読み取れると、日本語学習者の中には「にとって」を使ってしまう人がいることが分かる。

### 5.5. V (15~16) について

次に、先のVの例15~例16 (図15~図16) の選択傾向について論じる。



例15は述語部分が名詞形の「～の理解」になっている。この場合、日本人は「について」と「に対して」のどちらも選択している。ここで「について」を使うと動作主が対象である「幸福」に近付いて認識するという意味になり、「に対して」を使うと動作主が対象である「幸福」に向けて理解しようと働きかけるという意味になる。この場合、中国人(上級)と中国人(中級)も日本人と似た選択をしている。

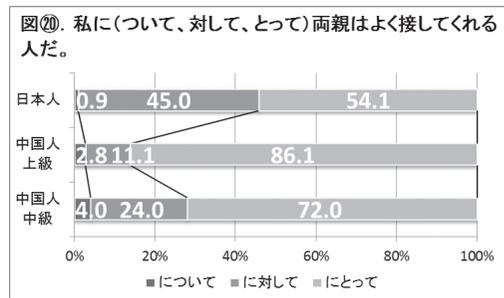
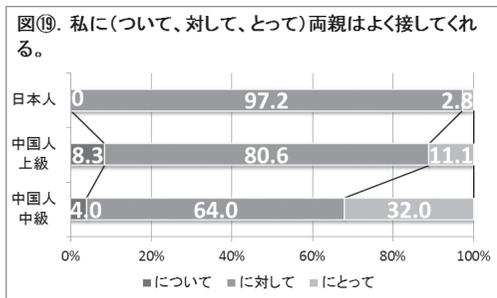
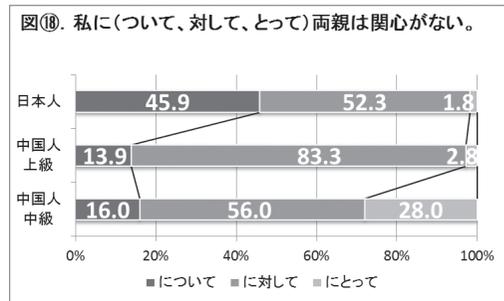
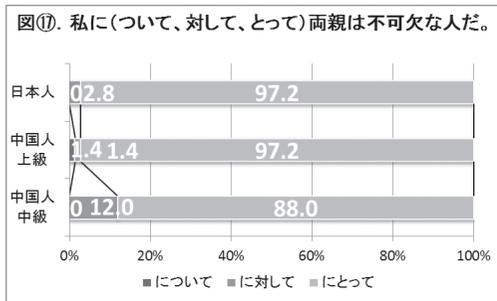
次の例16は述語に「理解する」という動詞が来ている。この場合、日本人は「について」の選択率が92.7%と高い。これに対し、中国人(上級)と中国人(中級)は「について」と「に対して」のどちらも選択しており、例15と似たような選択傾向を見せている。このことから、日本人は名詞形の「～の理解」と動詞形の「理解する」を区別して捉えているのに対し、中国人学習者は両者を区別していないことが分かる。

### 5.6. VI (17~20) について

最後に、先のVIの例17~例20 (図17~図20) の選択傾向について論じる。

例17は述語に「不可欠な人だ」が来ている。この場合、「不可欠な人だ」は価値判断の意味が強いため、日本人も中国人(上級)も中国人(中級)も「にとって」の選択率が高くなっている。

次の例18は述語に「関心がない」が来ている。この場合、日本人は「について」と「に対して」の選択率がほぼ半々になっている。ここで「について」を使うと、動作主である両親が対象である私に関して「関心がない」という認識的態度を取ることを表し、「に対して」を使うと、動作主である両親が対象である私に向けて「関心を示さない」という働きかけを表す。これに対し、中国人日本語学習者は中級も上級も「について」より「に対して」の選択率の方がかなり高く、日本人に比べて「関心がある/ない」を働きかけの意味で捉えやすいことが分かる。また、中国人(中級)は「にとって」の選択率も28.0%と高くなっている。このことから、中国人(中級)はこの文を「両親は私のことに関心がない人だ」という価値判断



のイメージでも捉えやすいことが分かる。

次の例⑲は述語に「よく接してくれる」が来ている。この場合、日本人は「に対して」の選択率が97.2%と高く、対象である「私」への働きかけを表す文として捉えやすい。この場合、中国人(上級)も日本人と似た選択傾向を示している。しかし、中国人(中級)は「に対して」の選択率が64.0%と最も高いものの「にとって」の選択率も32.0%ある。この場合も、例⑱と同様に、中国人(中級)はこの文を「両親は私に良く接してくれる人だ」という価値判断のイメージで捉えやすいことが分かる。

次の例⑳は述語に「よく接してくれる人だ」が来ている。この場合、日本人は「に対して」も「にとって」も選択している。ここで「に対して」を選択した人は「よく接してくれる人だ」の「よく接してくれる」という相手への働きかけを表す部分に係ると捉え、「にとって」を選択した人は「～人だ」という価値判断を表す部分に係ると捉えていると考えられる。この場合、中国人(上級)と中国人(中級)は「に対して」より「にとって」の選択率の方がかなり高くなっている。このことから、学習者にとって例⑳は価値判断のイメージが強い文であることが分かる。

## 6. まとめ

以上、本稿では日本語の複合助詞「について」、「に対して」、「にとって」の選択について、日本人、中国人(上級)、中国人(中級)の違いを比較しながら論じた。その結果、各被験者

表1 被験者グループごとの複合助詞と述語の共起傾向  
(網掛けは日本人と不一致の部分を示す)

	日本人	中国人 (上級)	中国人 (中級)
について	考える、悩む、理解する、知っている	考える	
に対して	反対しない、よく接してくれる	関心がない、よく接してくれる	
にとって	欠かせない、重要なことだ、不可欠な人だ	重要なことだ、不可欠な人だ、よく接してくれる人だ	不可欠な人だ
について に対して	疑問を持つ、興味がある、関心がない、設計がある、の理解	悩む、疑問を持つ、興味がある、設計がある、の理解、理解する	考える、悩む、疑問を持つ、興味がある、設計がある、の理解、理解する
に対して にとって	反対しない人物だ、よく接してくれる人だ	欠かせない、反対しない、反対しない人物だ	欠かせない、重要なことだ、反対しない、関心がない、よく接してくれる、反対しない人物だ、よく接してくれる人だ
について にとって	考えるのに重要なことだ		
について に対して にとって		知っている、考えるのに重要なことだ	知っている、考えるのに重要なことだ

はおおよそ表1のような複合助詞と述語の組み合わせで捉えていることを見た。表1は左の列の複合助詞の選択率が20%以上あったことを示している。

これを見ると、日本人は「について」、「に対して」、「にとって」それぞれに共起しやすい述語のパターンが決まっており、一部「について/に対して」の両方に使える述語もあるものの「に対して/にとって」や「について/にとって」の例は本調査の範囲では見られなかった。なお、表1の「に対して/にとって」や「について/にとって」の欄にあるものは連体修飾節や補文構造を持つ表現で、述語部分を2つ持ち、そのどちらにも複合助詞が係りうるものである。

これに対し、中国人(中級)は述語に見合う特定の複合助詞を選ぶのが難しいようで、日本人なら一つの複合助詞に集中する場合でも複数の複合助詞に選択が分かれる傾向が見られる。特に日本人には見られない「に対して/にとって」が多く見られる。しかし、中国人(上級)になると日本人の選択に近付いていき、特に「にとって」の使い方が身に付いていくことが分かる。ただし、「について」を選択するのは難しく、「考える」以外はなかなか日本人のように「について」が選択できないようである。

本稿では例(1)~例(5)の誤用例をきっかけにして、ケーススタディ的に「について」、「に対して」、「にとって」の選択について考察した。そのため、他にも調査すべき例文が多分に残されている。本稿の結果を基にしてさらに分析を進めていきたい。

付記：本稿は平成28-32年度科学研究費基金（基盤研究(C)）「中国人日本語学習者におけるポートフォリオ型学習データベースの構築と文法習得の研究」（研究代表者：杉村泰、課題番号16K02809）による研究成果の一部である。

### 注

- 1) 横田 (2006) ではこれに関して詳しく説明されていない。これは「を」と「に対して」の置き換えの問題であるため本稿でも詳しく論じていないが、今後の課題としたい。
- 2) 残り4問については杉村 (2019) で論じている。
- 3) 「中国人 (上級)」も「中国人 (中級)」も「について」、「に対して」、「にとって」は既習項目である。「中国人 (中級)」25人の内訳は、N1合格者は1人、N2合格者は13人、級無し (未受験) は11人である。本稿では科研費の調査対象である上海師範大学の2年生25人の傾向を見るために、この25人をまとめて集計してある。なお、「中国人 (上級)」の中の上海師範大学の学生 (10人) は全員大学院生である。
- 4) この場合、もし「とって」を使うと「今回の選択は将来の人生にとって、考えるのに非常に重要なことだ。」となり、何を考えるのかよく分からない文になる。そのため、選択テストで「生き方を考える」のように目的語が付いていたなら、「にとって」の選択率がもっと高くなっていただかもしれない。

### 引用文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2002) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク
- グループ KANAME (編) (2007) 『複合助詞がこれでわかる』、ひつじ書房 (項目担当「について」柏崎雅世、「に対して」横田淳子、「にとって」金子比呂子)
- 杉村 泰 (2018) 「複合助詞「について」「に対して」「にとって」の誤用分析」『日語教育与日本学研究—大学日語教育研究国際研討会論文集 (2017)—』、華東理工大学出版社、pp. 84-88
- 杉村 泰 (2019) 「複合助詞「に対して」と「にとって」の選択に関する一考察」『日語教育与日本学研究—大学日語教育研究国際研討会論文集 (2018)—』、華東理工大学出版社 (印刷中)
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例—』、スリーエーネットワーク
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』、アルク
- 横田淳子 (2006) 「「に対して」の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』32号、東京外国語大学留学生日本語教育センター、pp. 19-31

キーワード：複合助詞、「～について」、「～に対して」、「～にとって」、中国人日本語学習者

## Abstract

On Choice of Japanese Compound Particles “*ni tsuite*”, “*ni taishite*”, “*ni totte*”:  
A Comparison between Native Speakers of Japanese and Chinese Speaking Learners of Japanese

Yasushi Sugimura

The purpose of this paper is to clarify the difference in choice of Japanese compound particles “*ni tsuite*”, “*ni taishite*”, “*ni totte*” between Japanese native speakers and Chinese advanced and intermediate level learners of Japanese. Native Japanese speakers have a tendency to choose these three compound particles like (1)–(4), but Chinese learners of Japanese have another tendency in particle choice.

- (1) *Watashi wa jiken no shinsou ni {tsuite / \*taishite / \*totte} karngaeta.*
- (2) *Watashi wa jiken no shinsou ni {tsuite / taishite / \*totte} gimon wo motta.*
- (3) *Watashi wa jiken no shinsou ni {tsuite / taishite / \*totte} kyoumi ga atta.*
- (4) *Kare no syougen wa jiken no shinsou ni {tsuite / \*taishite / totte} karngaeta.*

In this paper we argue about the factor of error of compound particle choice made by Chinese learners of Japanese. The results of this study may be useful when compiling dictionaries and grammar books as well as Japanese language teaching.

Keywords: compound particle, *ni tsuite*, *ni taishite*, *ni totte*, Chinese speaking learners of Japanese